

石田翔召天記念会（「ヨハネ福音書」を読む（7）前半） 翔ちゃんと私

2010年1月17日（東京 新宿）

奥田 昌道

大きな喪失感 翔の思い出 御殿場へ行くのを楽しみに 弟思いの兄貴 人間にとって何が大切か 一端8月14日の夜に死んだ イザヤ書53章の「見栄えなき姿」 一粒の麦 極みまで愛し 給えり 十字架の愛 祈り

●大きな喪失感

やはり、一人の愛する者がこの世から姿を——この世においてもう見ることができない——姿を消したというその喪失感、失ったという感覚というのは消えません。

「クリスチャンだからそんなことはないだろう」

とか、そんなことは大嘘でありまして、それは絶対ありえないことだと思います。それは体験した者でなければわからないだろうと思います。でも、そういうことと、それから自分として何をなすべきか、いかに今後生きていくべきか、ということとはまた別問題です。一方では大きな喪失感をいだきながら、しかしそれを乗り越えていく。あるいは乗り越えさせていただくというのが、人間の在り方ではないかなと思っています。

今日は、この東京の皆さま方のご好意によって、こんな「石田翔ちゃん召天記念会」を開いていただいて——22歳の若者をつかまえて「翔ちゃん」というのはなんとも、いささかいかがかとは思いますが、やはり我々の気持ちとしてはいつまでも「翔ちゃん」なんです。何歳になっても「翔ちゃん」という気持ちがありますので——これはとてもありがたいことだと思います。石田翔ちゃん召天記念会「翔ちゃんと私」という題で45分ばかりお話するようにと承りましたが、さて自分でいろいろ思い起こしてみしても、まとまったお話ができるわけでもない。ある面では辛いことなんです。ずっと過去から今日までを振り返って、「ああだった、こうだった」ということを一つ一つ確認していくというのはやはり辛いことです。

『介助犬が家族になったとき』（2000/12/25 発行、WAVE 出版）という本を昨日、読み返してみました。これは2000年に石田俊浩君が主として8割方書いて、それに対して裕美が「妻の言い分」という言葉で、感想なり自分の考えを少し述べている。読み返してみたら、なかなかよくできている本です。こんなに素晴らしい才能があったのかと、今になって思っている。それを見ますと、翔ちゃんがどのようにして生まれ、それからどのようにして13歳を迎えたかということがよくわかるようになっていきます。それによりますと、1987



年の前年7月に結婚しまして翌年に、

「5月18日の午前5時18分に3300gの非常に元気な男の子として生まれた」

と書いてある。数か月後に福山型筋ジストロフィーという判定がくだって、それからのい
ろんな苦労話をここに書いています。介助犬をいただいて——「雅^{ミヤビ}」という名前で、今で
も一緒に生活していますが——そういう13歳までの物語がここに記^{しる}されています。そこに
家族の写真とか、本人が描きました絵も収録されていたりして、ひとつの記念だと思って、
持つてまいりました。

まずは、どういう所に住んでいるかということからお話しないといけません。ここに地
図を書きます。ここが鴨川で河川敷がありますが、夏の特別集会をやりました「くに荘」
というのはこの荒神橋の近くにありまして、その橋から約400メートルくらい南の方へ下り
ました所に、まず翔が亡くなるまでのほぼ半年ほど過ごしましたマンションがあります。
これは実は私の研究室として——大学を退職しますと行き先がありません、部屋も書斎も
ありません——それで研究室として、ちょうど5、6年前にこれが出来上がったことを聞い
たものですから、それを入手しました。「ディアステージ^{かみぎよう}上京鴨川」というマンションの一
室に私のささやかな部屋があるわけです。そこに最後は住んでおりました。それから、ほ
ぼ12〜13メートル下りますと、そこに「山紫水明処」という——これは文化財なんですけ
れども——頼山陽の「山紫水明処」という書斎兼茶室があります。その母屋を借りまして、
そこが石田ファミリーの住^{すみか}処だった。けれども、それは日本家屋なので冬の寒いこと。風
吹き通しですから、どこか欄干から風が入ってきたり、そういう所ですのでも寒いと
いうので私の所を避難所にして、そこで冬は過ごすようになりました。そのまた十数メー
トル南に我が家があるわけです。ちょうど二階から見おろした所が河川敷で鴨川が流れて
いる。東三本木通りがこの辺にありまして、そこから路地を入っていく所になります。そ
の少し南の方に丸太町の橋がある。丸太町通りです。そして、東方に東山、北方に北山が
見える所に我々は住んでいるということになります。

2、3歳の頃までは、一乗寺の方のアパートに住んでいたけれども、そこはとても不便で
す。夜、母親と一緒に翔ちゃんが私の家に遊びに来ます。そして帰る時にはいつも、「帰り
たくな〜い!」と言って泣く。それを見かねて、私の家内が少し親しくしていた方がその
山紫水明処の母屋に住んでおられたので、その方がいずれ東京へお帰りになるということ
で、そのあとをお願いしてお借りして、そこに住むことになりました。

去年（2009年）の確か1月8日に翔と弟の^{こうへい}衡平が宇多野病院へ入院して、そして戻っ
てきたのが2月25日だったと思います。それ以来、私のマンションにずっと住み続けるよ
うになった。つまり、やはり温度調節が非常に大事なものですから、そこに居すわって—
—私の研究室は名ばかりで、私はだんだん隅っこに追いやられて、パソコンだけをそこで
やるという——そのかわり毎日、会うことができるという恵みにあずかったわけです。そ



んな生活をしておりました。

●翔の思い出

翔の思い出ということからお話いたしますと、私の記憶に残っているのは一度、2004年——私はその頃、同志社大学の法科大学院のほうに勤めておりましたが——その5月頃に急性肺炎で京大病院に救急搬送されたことがありました。私は何かの用で道路へ出て行ったところに、ちょうど翔が担架に乗せられて救急車で搬送されるところを見つけて、

「翔ちゃん、大丈夫だよ。おじいちゃんがついていいるから大丈夫だよ！」

と言って励ました。そのことを翔はよく憶えてくれていて、そのあと集中治療室でかなり大変だったけれども、だんだんよくなつて、やがて退院できるようになりました時に、

「これはおじいちゃんのお陰だ」

と、本当にしみじみと言ってくれました。

「おじいちゃんが祈っているから、おじいちゃんがついているから、だから、翔は

絶対大丈夫だ」

ということをおもってくれていたようです。

それからもう一つ、翔の思い出としては——毎年冬になると風邪をひいたりして入院騒動が起こるけれども——一昨年（2008年）の冬の1月に衡平がやはり様子が悪くて入院する。この兄弟二人を分離できないんですよ。世話と一緒にしないといけない。ところが、病院の方は部屋を別々にしたがる。病気でもない人間と一緒にそこへ入れるわけにいかない。それで別の部屋に入れられる。そうすると、そこで翔もやられてしまった。だから、ピンピンしていた翔が宇多野病院に放り込まれたおかげで、そこで寒くて何か知りませんが、病気になってしまって、しばらく入院しなければならぬに陥った。

まだ翔が病気になっていない時ですが、昼間は一緒にそこで過ごすけれども、夜は寒い石田家へ帰ってこなければならぬ。お父さんの車だったと思うけれども、私と翔が一緒に帰ってきて、そこで男二人で一緒に寝た。ところが、寒くて寒くて、私は山の服装みたいにすごい防寒のものをまといまして、それで寝たけれども、やはり寒かった。でも、そのことを翔はよく憶えてくれていて、

「おじいちゃんと一緒に寝たよね」

と言う。一回きりでした。そうやって翔と一夜を共に過ごして他に人がいないということはその日だけでしたけれども、それをいつまでも憶えてくれていました。その時に、

「ああ、翔とは運命共同体なんだな」

ということをおもいました。その後、それが寒すぎたんでしょうか、病院に戻ってから、翔も悪くなりまして、それで兄弟一緒に長いこと冬のあいだ入院していたことがありました。そして、三度目が昨年（2009年）の1月8日に二人が入院しました。そして2月25日に



やつと帰れた。その時にはもう自分の家には帰らないで、私のマンションの研究室を住処にするようになった。

それから、思い出と申しますと、翔は——衡平もそうだったけれども——とにかく、外へ出るのが好きなんです。人々の中に居るのが好きです。それで、皆さんとの係わりで申しますと、御殿場での夏の特別集会のときに、4年か5年か一緒にそこで過ごしたと思う。もう小さい時から、小池先生の頃からとにかく特別集会があれば、家族全部で行くということにしていましたから、生まれた翌年、箱根高原ホテルへ連れて行ったことをよく憶えています。その時、小池先生が翔のために歌を作ってくださいました。「主さま、あなたは」〔召団讃歌A49、1988/83作詞〕という歌です。

「これは合唱すべきものにあらず、独りで静かに歌うべきもの」

と仰いましたが、それをそつと私に対して、

「これは翔ちゃんのことを思いながら書いたんだよ」

と言われた。

「主さま あなたは わが肉の靈肉、……わが骨の靈骨」

という讃美歌です。そんなこともありました。それが1988年、生まれた翌年です。とにかく、特別集会があれば家族みんなで出かける。その頃、私は、

「祈りによつて病が癒されるのではないか」

と本気で思っていた。でも、そうでないということがだんだんわかりました。そうすると今度は、それをそのまま自分で受け入れようという気持ちに変わりました。何か「癒しの信仰」だとか、「信ずれば何でもできる」とかいうことを表面的に受けとつて、そして祈りがかなえられて、身体障害も癒されるということとは、この翔の体験をとおして私はもう思わなくなりました。娘も、そのことはもう求めなくなりました。ある時、どなたかが——これは善意からですけれども——

「ああいう所で祈っていたかどうかではないか。すごく祈ってくれる人がいるから行こうではないか」

とか、そういうことを言ってくださった時に、

「翔と同じような苦しみをかかえている者全部が同時に癒されるなら、それはお受けするけれども、翔だけを癒して欲しいとは思わない」

と、確かそういうふうな母親の裕美が言っていたのを私は思い出しております。

ですから、やはり翔のこの病気というものを通して、私は信仰というものの本当の在り方を思いました。これは永遠の課題だと思う。聖書に癒しの記事がたくさん出てくるでしょ。

「信ずる者にはどんなことでもできる」

とか、「信ずれば、そうなる」とかいうことが出てくる。また、癒しをかかえて伝道をしているアメリカの伝道師なんかも居られる。その癒しの伝道もまた実現している。私も目撃



者です、かつて。でも、そういう癒しの信仰というものをスローガンにしている人は、
「癒されないのは不信仰だからだ」

と、逆にそうなるんです。

「あなたの祈りが足りない、あなたは不信仰だからだ。神さまは何でもできる」

と。そうなりますと、非常な躓きになります。そういう癒したまものの賜物をもらっているのは、

「それをいわば一つの手段としてキリストの御名を伝えるように」

という特別の使命、あるいは召しを受けとった方がなさっていることであって、それを普遍化してはならないというふうに、私は受けとるようになりました。それでずいぶん気が楽になりました。すべてそうなんです。聖書というのは非常に躓きの書である面があります。非常に深い救いの書であると同時に、我々凡人にとっては躓きの石になるようなところがたくさんある。それを一つ一つの体験を通して、

「本当のものは何か」

ということ、近づかせていただくという、これが我々の人生ではないかと思う。しかも、この人生というのは一人一人みんな違う。翔は翔の人生を神さまから賜たまわったわけですし、私たち一人一人がみな賜っているんです。客観的に「こうあるべきだ」というのではなくて、「主キリストとあなた」「主キリストと自分」、その縦のラインにおいて自分がどう在ることが、どう生きることが主のお望みなのであるか、主のご計画であるか、

「主の御意みこころはいつこにありや？」

ということをしつかり受けとっていく。これが最も大事なことで、私は翔との生活を通して、次第に自覚するようになりました。

決して全体的に「こうあるべきである」とか、「そちらでそうなったんだから、こちらもこうならなければならない」とか、そういうことではなくて、一人一人みな違う。一人一人に対して神さまがお持ちになっているご計画、それに従順に従っていくということが人間としての本当の在り方であろうと、私は思うようになりました。

●御殿場へ行くのを楽しみに

さっきの御殿場（夏期特別集会の開催場所、御殿場YMCA東山荘）の話に戻りますと、翔は本当に御殿場へ行くのを楽しみにしてまして、お正月が明けますと、

「ああ、今年また夏、御殿場やな」

と。四月になると、

「いよいよ近づいてきたな」

と（笑）。まだ4月ですよ。もつと近づくと、

「もう本当にいよいよだな」

とか。そういう、自分は動けない体からだなんです。もちろん、電動車椅子に乘せられたら、指



先でコントロールして、あちらこちらへ行けるわけですが、自分自身では何もできないのにもかかわらず、とにかくそうやって御殿場へ行くのが楽しみではない。それで一か月前になりますと——新幹線の特別な身体障害者用の11号車というのがある——その11号車を一か月前に予約して、当日それを確認して、その11号車の特別室に入り込むわけです。その特別室に入りますと、今度は私との遊びが始まる。

「さあ、トンネルがきた。何秒間で通過するか測ろう」

と。私はランニング用のストップウォッチを持っていますから、それで測って

「あ、これは55秒だった、すごい」

とか、そういうことをやって遊んだりとか、また帰りは帰りでそういうことをして遊ぶ。それがまた本人は楽しいらしくて、そこへ衡平が来ましても、

「衡平、じゃまだから向こうへ行っておれ。おじいちゃんと遊んでいるんやから」

なんて。そういうふうなことを、御殿場へ来るたびに味わってきました。トンネルばかり測っていてもしょうがないから、今度は川の長さを測ってみるとか。大井川とかを端から端まで何秒で渡れるかとか、それをやってみたり。また、「こだま」で行きますと、よく「のぞみ」なんかが横を通過していく。

「何台通過していくか当ててみよう」

とか言ってやってみたり、そういう遊びも翔の楽しみの一つだったように思います。そして、御殿場へ来ますと、本当に皆さんに大事に大事にしてもらいまして、皆さんにお会いできるのを楽しみにしておりました。

その後、翔はやはり最後の2008年に御殿場へ来た時にはもう体力の限界だなということをしみじみ感じました。その長い旅行は体に負担なんです。ボランティアの方々が車で運んでくださるけれども、そのすべてが本人にとつてとても負担に感じられましたので、私はお願いして、来年（2009年）は京都でやらしてほしいということを申し出た。これは全くそういう事情であって、もし御殿場になりますと、私は単身で来なければならない。他の者は全部、介護のために残らなければならない。私の妻もそうです。石田俊浩・裕美夫妻がもちろん一番の最高責任者ですが、それを側面から援助していたのが私の妻ですから。それがやはり残らなければならない。私一人が御殿場へ来る。これでは私ばかり——意味がないと言ったら変ですけれども——よくないと思いました。それで、京都を会場とする集会を昨年やっていただいた。残念ながら、その集会をやっている間は、翔は入院しておりました。夏期特別集会との関係ではそんな思い出がございます。

●弟思いの兄貴

それから、「人となり」といったところから見ますと、本当に翔君というのは弟思いでした。弟は衡平というんですけれども、あまり名前で「衡平」と呼ばないで、「弟、弟」と言っ



えらそうに呼ぶんです（笑）。けれども、本当に弟思いの兄貴でした。

それから、非常に周囲の方々への配慮を忘れない。これは感心しますね。ヘルパーさんだとか、私の家内だとか、そういう者たちの負担を少しでも軽くしようと思つて、いろいろ心配りしていたように思います。例えば、私が衡平の家に行くでしょ。行つていると、一緒に長い時間居りたいものだから、私の手を握ったり、いろんなことを話しかけて、私を帰させてくれないんです、夜なんかね。そうすると、翔が

「もう、ボチボチおじいちゃんを解放さしてあげ！ おじいちゃんを帰らしてあげ！ 東京から帰つてきて疲れておるんやから」

なんて言つて、翔は衡平と私の間を切り離してくれる。それで衡平もしぶしぶ、

「そうか、じゃ、またあした」

というようにことで、私は帰るんですけれども。なにかそういう非常によく気がついて、周りの人のことを思つている。自分は不自由でしんどいにちがいないんだけど、そういうふうな心配りが実によくできる子でした。

それから、翔はそういう重い筋ジストロフィーという、これは段々あとになるほど酷くなつてくる病気です。もう足先でも最後は90度くらいに曲がつて、それ以上は伸びないとか、段々、筋肉が収縮していくような、そういう病ですけれども、そういうふうな病を持っているということを翔はほとんど、

「自分は運が悪い。何で自分だけがこういう病気になつていいのか」

と、一言も言わなかった。そういう状況である自分というものをそのまま受け入れた。そして、いろんな方のお世話になりながら、

「ありがとう、ありがとう」

と言つている。ちよつと背中を掻くことも何もできない。ちよつとした所を手を伸ばして痒い所を掻くとか、その他あるゆることを人の助けをお願いしないとできない。全くそういう不自由そのものの中に生活している。けれども、そのことを、自分の運命をかこつとか、そういうことは一切なかった。ひよつとしたら、元気な人が不自由になつたら、かこつのかも知れませんが、元々そういうところで育つてきましたせいなのでしょうが、本当にそういう筋ジストロフィーという病気をそのまま自分は受け入れて、その中で最大限――まあ私から見ても――にこやかに明るく、楽しいことを次から次へと探しだして、それを自分の生きる喜びに変えていつて、明るく生きていたなという思いがいたします。

「病気と闘う」というと、肺炎とかいう呼吸器官の病気とは闘わざるをえないわけです。本人も苦しいし、それは正に闘病生活というにふさわしいけれども、それ以外のことに關しまして、自分の身体の障害ということに關しては、本当に翔ちゃんはそれを自分のそのままありのままの姿として受け入れて、明るく朗らかに誰に対してもよく挨拶をしました。それから、元気な時、12〜13歳の頃ですけれども、私の家は東三本木通りから路地を入つ

ていく。その路地を入ってくる時に、水戸黄門の「人生楽ありや苦もあるさ」という歌（テレビ番組「水戸黄門」の主題歌）を大声で歌いながら入ってくるので、すぐわかるんです。「あ、翔がやって来たな」と。ほんの最近までそうだった。私が最高裁を辞めて（2002年）、京都に落着くようになりましてから、しばしば——ヘルパーさんに抱かれて車椅子に乗りますね——お天気の良い日には、その石畳の路地を入ってきて、手を伸ばしてチャイムを押したりする。手伝っていただいて押しているのかもわかりませんが、それでも。そして、私が三階の屋根裏部屋という小さな私の居間ですけれども、そこから下りてきますと、

「おじいちゃんの顔が見たかった。ご挨拶に来ました」とか言う（笑）。

「ああそうか、会えてよかったね」

というようなことを言っていました。

それからまた時たま、その三本木通りの路上に車椅子で出てきていたことがある。その時、私が自転車で大学へ出かけようとすると、

「あつ、おじいちゃんー！」

と声をかけてくる。私もとても嬉しくて、

「じゃ、行ってくるよー！」

と応える。しかし、そのたんびに私は思いましたね、

「いつまでこういう生活ができるのだろうか。これがひよつとしたら、最後の別れになるかもしれない」

という思いは絶えず持っていました。元気な方々は、「自分がどうなるか、また相手がどうなるか」と、ほとんどお考えにならないと思う。ところが、私と翔ちゃんの関係は、

「さよならと言ったら、これがひよつとしたら最後になるかもしれない、いつまで

これが続いてくれるのだろうか」

という、そういう思いを絶えずもちながら生活していたというのが実感です。「願わくば、いつまでも、いつまでも」という思いがあるわけです。

2009年5月18日に22歳の誕生日を迎えてくれました。その時に父親が撮った写真がこれなんです。これを大きく引きのばした写真を告別式の時に、後から光を当てて素晴らしい写真を飾っていただいた。その小型版がこれで、とてもこれは元気な時です。そして、8月になると病にたおれたわけですから、そのしばらくのちということになります。この写真がとても私も気に入っていますので、今日持ってきました次第です。

さっきの「おじいちゃん」という話ですけども、翔が私に呼びかけた

「おじいちゃんー！」

という、親しみをこめて呼んでくれるものですから、その呼び声だけでこっちはホロリとするわけです。そういう心の通いというのがありまして、これが私の宝物でもあります。



●人間にとって何が大切か

翔は私たちにやはり、「人間にとって何が大切か」ということを本当に教えてくれたと思う。この世は競争社会ということです。競争社会は、少しでも他人より秀でている者、優れている者が評価されるわけです。それが何もない者は全部、蹴落とされていく。蹴落とされた者はまた、それをひがんだり、悩んだり、時には自分で死の道を選んだりとかいうのがこの世の常です。そしてまた、親御さんたちは、受験競争に勝つように、子供の尻を引っぱたいて遊びもさせないで、

「さあ、塾へ行つてらっしゃい。勉強しなさい！」

と、そういうのがこの世の現実です。ところが、翔といい、弟の衡平といい、これは全くそういう世界とは無縁の世界です。初めからもう決められてしまっているんですね。これはある意味では楽ですよ、競争しなくていいんですから。周りの者は大変ですけれども、おおよそ競争しなくてもいい。その微笑^{ほほえ}み、輝き、存在そのものの、それが何とも愛^{いと}おしいという姿を絶えず私たちの目の前に見せてくれているわけです。ですから、この世の価値基準とか、評価基準と全く無縁な世界で生きている。しかも輝いて生きている。また、ヘルパーさんにしても、ボランティアさんにしても、世話をする人が翔と本当に喜びを共にしているということ、何か「世話する者とされる者」という感じではないんですね、同じ世界を生きているという感じがする。

だいたい、ボランティアさんとかヘルパーさんになる方は、そういう面が強いお方が仕事として、あるいはボランティアにやってくださるんでしょうけれども、本当に翔は年齢も年齢ですから、ヘルパーのお兄ちゃんたちとも友だち付き合いをしていました。全然、世話になつていいるから気の毒——「気の毒」というかな——こっちは「肩身が狭い」とか、そんなことは全然思わない。全く対等で、それをまたお世話なさる方が喜んでくださっていたように思う。しかも、明るいでしょ。だから、そういう明るい子供たちと一緒に生活できるというのは、ある意味では、そのお兄ちゃんたちにとっても一つのオアシスではなかったのかと、勝手に私は思っている。

それから、翔は車椅子であちらこちらに行きます。鴨川にいた時でも、橋の下で生活している人たちとも仲良くなりまして——何の偏見もありませんからね——だから、顔が広いですよ（笑）。みんなお友だちという感じなんです。そういうことも思い出します。

そのように、健全な人は何かが欠けますと、文句を言ったり、

「これが無くなつたら、自分はダメになる」

とか、そういうふうにありますけれども、初めから何も無い、そういうものと無縁の世界に生きていて、しかも輝いて生きているという、その在り方そのものが今の世の中に対して一つの光を放っているのではないかと、そんな思いがいたします。

ちょうど——東京では昨年から月一回、「ヨハネ福音書を読む」の講筵をやってきていま



すが——生まれつき目の見えない人が道端に座って乞食をしていたという場面がありますね。お弟子さんたちは、

「この人が生まれつき目が見えなくて乞食の生活をしているのは、本人の罪でしようか、それとも親の罪でしようか？」

と、イエスさまに尋ねるところがあります。その時に主は何と仰ったか。

「この人の罪でも、また親の罪でもない。この人の上に神の御業が現れるためである」

と仰った。その時なされたことは、唾で泥をこねて、その目の見えない方の目に塗って、

「さあ、シロアムの池——遣わされたる者という池——へ行つて洗つてきなさい」

と。その通りにしたら、目が見えるようになったという記事がヨハネ伝9章に出ています。あのときにもお話したと思うけれども、私はあの目の見えない人は素晴らしいと思う。なぜなら、普通ならば、

「神さまがいるなら、なぜ私を目の見えない状態で生みやがったか!？」

なんて、文句の一つも言うでしょう。それからまた、

「唾で泥をこねて、それを目に塗って、『さあ、あの池へ行つて洗つてこい』なんて、

何という失礼なことを言うのか、あなたは!？」

と。イエスは説明も何もなしにただそう仰る。それに対して、「はい」と言つて行つたこの素直な盲人の姿に私は非常に感動した。イエスは、

「この人の上に神の御業^{みわざ}が現れるためである」

と言われた。ということは、

「神さまの栄光がそれにおいて現れてくるんだ」

ということなんです。何も癒されたことが何かということではなくて、その一番お終いのほうに出てきますけれども、

「見える人は見えなくなる。見えない人は見えるようになる」

とある。「見えない人」というのは、

「自分には何もない、自分はナッシングだ」

と思つている人には豊かなものが与えられる。

「自分は豊かであつて、何でも分かっている。だから、神さまなんか要らない」

と言ひ張つている人は本ものが見えてこない。人間の本质、あるいはこの世のこと、神さまのこと、すべて本当に人が人として知るべきことが、何も分からないで終わってしまう。けれども、何も持たない、何も見えなかった——肉体的にです——その人はイエスさまに出会うことによって本当のものが見えてくる。本当に豊かな世界に入れられていく。そういうことをヨハネ福音書9章は我々に伝えているんだと、私は受けとった。



ちょうど、翔君においてもそういう姿でこの世に生み出された。それをそのまま受け入れている。その翔君において神さまの栄光が正に現れていると、そういうふうなことを私は感じます。

よく、小池先生が仰いました。

「ゼロ・イコール・無限大」(0=∞)

と。人間は自分をサムシング(何ものか)にしたがる。サムシングにしているその姿が「罪」という姿だと。神さまの前には何も無いんだ、人間は本来、無一物だ。すべて与えられたものは、善きものであろうと、人間にとつては善くないように見えるものであろうと、すべては神さまから与えられて、そこに神さまの栄光が現れる。そういうどこまでも神さまが主体であつて、我々はそれをただ受けている対象にすぎない。そのことを素直に受け入れるという姿が「心の貧しい」姿です。

「自分は何ものでもありません」

と言つて、神さまの前に自分をさらけだして、そのまんま光を浴びている姿。その人において本当に神の栄光が現れている。けれども、

「自分はサムシングだ、何ものかだ」

と言つて、神さまの前にふんぞりかえっているような者は、それつきりで終わってしまう。それ以上、何も展開しない。見るべきものも見ることができない。そういう逆説的な世界が、神さまの世界ではないだろうかと思う。だから、あの山上の垂訓の中に、

「幸いなるかな、心の貧しき者」

とある。「心には何もありません」と言つて空っぽになっている者は幸いだという。

「悲しんでいる者は幸いだ」

という。神さまが慰めとなつてくださるから。

「柔和なる者は幸いだ。その人は地を継がん」

と書かれている。おおよそこの世的にプラスと思われるものをみな慕うわけです。それがどういうわけか知らないけれども、初めから奪われている者、あるいは伴っていない者、その者の上に神さまの愛の御業が現れてくる。どんな形で現れてくるかは誰も分からない。分からないけれども、それをそのまま受け入れて、しかも主を讃えることができるなら、それは最高の生き方ではないのだろうか、そんなことを私は思う。

この石田ファミリーと私は、それこそ「スープの冷めない距離」で生活してきたものですから、共同体という気持ちがありました。そのファミリーに全然、暗さがない。本当に明るい。それも一つの奇蹟ではないかとさえ思います。

●一端8月14日の夜に死んだ

翔が病氣になった経緯^{いきざつ}を申しますと、このように5月18日にはこんなに元気であつた翔



が8月に入りまして——インフルエンザが流行りましたね——8月7日にまず衡平がインフルエンザにかかった。そうして急遽、救急車で搬送されて市内の或る病院に入れられました。それから一日置いて8月9日に——私はその時、山口へ行っていたんですけれども——その前日から山口へ出かけていた。出かけます時に、

「明日8月9日の午後2時には帰ってくるから、また会おうね」

と言つて、そう約束して山口へ出かけた。そして、山口から帰ってきたら、9日、翔はもういない。病院へ搬送されてしまった。そこはインフルエンザの専門病院というか、我々の行ったことのない知らない病院でしたけれども、そこへ入れられた。それで、不思議なことに衡平のほうはその後、元気になりました。ところが、翔はインフルエンザそのものは治ったようなんですけれども、その治療過程でいろんなプレッシャーというか、身体に負担がかかったんでしょうかね。それでとうとう身体がもたなくなつた。一端、8月14日の夜に死んだんです。どのくらいの時間かわかりませんが、それを40分間、必死に蘇生術を施してもらつた。

それは裕美が気がついた。衡平のほうにばかり気をとられて、ひょつと見たら、翔が真っ白だつたという。息もしてない。呼吸が止まつている。心臓も止まつている。すぐに詰所に連絡して、お医者さんと看護婦さんたちがあたふたと集まつてきて、必死に40分間の蘇生術を施して、やっと命は戻つた。けれども、意識は戻らなかつた。普通は20分しかやらんそうです、その蘇生術は。20分やつてダメだったらもう諦める。ところが、父親が必死になつて叫んでいる。その凄さに圧倒されたのか、自分たちの気がつかなかつたその負い目があるのか、40分間やつてくれた。それで甦つてくれたけれども、意識はしばらく戻らなかつた。

一か月後の9月15日にはいつも自分が入っていた宇多野病院に——そこは翔のことはよく知つてくださっているから——そこで継続治療を受けることになつた。それから次第によくなつてきて、11月21日に在宅治療に切り換えようという——それをその2週間くらい前からいろいろ相談して計画していただいた。そして、11月21日の土曜日にマンシヨンの部屋に帰つてきた。その頃は、耳は非常に——宇多野病院に居るときからそうでしたけれども——よく聞こえている。けれども、気管切開なんかされているものですから、声は出せない。目もあまりはつきりは見えてないようでした。けれども、こちらからの呼びかけにはよく反応してくれました。マンシヨンの自室へ帰つてきた時には、本当にニッコリ笑つていたということです。それから、こちらが話しかけたりすると、笑つてくれたりしましたので、よく分かっているのだという思いで、11月21日から12月14日まで、初日と召された日も全部入れますと24日間、我々の所で過ごしたわけです。

皆さまとの関係で申しますと、私は12月13日（日）ここでクリスマス集会をやったわけですね。その時に、翔ちゃんはこのいう情況だと、お話し申し上げたつもりです。土曜日の



晩に私が電話しますと、「コードレスの受話器を耳に当てて、とても嬉しそうな顔をしていた」とか、そういうことをお話し申し上げた。土曜日はそうでした。日曜日の晩は、私はクリスマス集会が終わってから電話しましたら、「ちよつと痰が詰まったりして苦しそうだ。でも、大丈夫だよ」と言われた。コードレスの電話で耳元へ呼びかけを伝えたりしていた。ところが、14日に上野の学士院での例会を済ませまして、夕方7時半に帰ってみると、家内が玄関で「翔が逝ってしまった」と言うので、びっくりしました。そういうのがその亡くなるときの様子だったんですけれども。実は、その日曜日の晩に、父親がギターを取り出してきて、賑やかな音楽会をやったという。翔ちゃんが好きな歌やなんかを散々歌いまくって、翔ちゃんは嬉しそうにしていたという。その翌日、少し様子がおかしくなると、京大病院に救急車で送っていただいて、そして二時間ほど経ったのちに、10時38分と聞いていますが、息を引き取った。そんな次第だったんです。

ここに裕美が書いた葉書がありますので、ちよつとこれをご紹介したいと思います。

「一か月が過ぎてしまいました。12月にはお悔やみをお届けくださってありがとうございます。ありがとうございました。翔はどんな時にも心やさしく忍耐強く、22年間私を支え導いてくれました。本当に立派だったと思っています。一緒に暮らせた日々は、とても私たちは幸せでした。御殿場の楽しい思い出をありがとうございます。お祈りくださつて、心から感謝しています。」

これは本当に裕美の素直な心を表現した言葉だと思います。実は1月8日から11日まで書道の展覧会があつて——裕美が中学の頃からずうつとお世話になっている書家の女性の先生ですけれども、私と同じ歳ほどの先生が指導なさっている——そこにいつも書を展覧会に出す。翔の書いた絵だとか、衡平が書いた絵とか、そこに私がちよつと言葉を添えたりする。その時に今年は衡平の書いた絵の所に私は言葉を添えました。翔が本来書くべき場所に裕美が翔への思いを綴つて書いてありました。それが今、ここに読みあげました、

「翔はどんな時にも心やさしく忍耐強く、22年間私を支え導いてくれました。本当に立派だったと思っています」

という、それをもう少し別な表現ですけれども、非常に翔を誉め称える、「あなたは素晴らしいかった」というふうな、翔を尊敬するような言葉がずうつと並んでいた。それはきっと本人の素直な気持ちを表わしたのだと思います。

「自分たちが翔を世話していたんだけど、実は翔によって自分たちは支えられていた」

という、そういう思いを両親ともいっているようですね。

特にまた、男同志の友情と申しますか、お風呂に入れるのはいつも父親の役目でした。そうすると、お風呂の中でいろんな話をしている。唄を歌ったりして。それからお風呂から上がりますと、訓練だと言つてね……、一生懸命にやっていました。そのやっている姿



がなんともうるわしいんですね。「これは男同志の裸の付き合いだな」と私は思いましたよ。湯船の中でだっこをしながら、いろんなことを語りかけている。また、歌ったりしている。そういう姿を——まあマンションですね——私はずうつとちよこ見たりもしました。ですから、たしかに翔君というのはあのような姿で22年間を生き抜いたわけですけども、周りの者に対して本当にいい感化を及ぼしてくれた。お世話している者が逆にいろんなことを教えられた。そういう思いがいたします。

●イザヤ書53章の「見栄えなき姿」

聖書を読みますと、なんだかその聖書に書かれている主のお言葉とか、主のお姿と翔君とが時々ダブルなんです。イザヤ書53章のああいふ言葉にしても。「見栄えなき姿」というような言葉が出てきたりとか、「彼は人の病を負った」とか。何も翔君が人の病を負ったわけではないけれども、何か翔はそういうものを背負わされて、この世に対して

「こんなふうな姿でも本当に喜びをもつて生きることができるとだよ」

と。この世の価値観に縛られている人は、そういう呪縛じゆばくから解放たれなさいと。それからまた、そういう者たちを互いに顧み合かえりつて支え合つていくことが大事なんだと。

お母様方の集いがありましてね、そういう身体のわるい人のお母様方の集いとかな繋つながりを通して、いろんなことをまた裕美も教わったようなことを言っておりました。この本にもちよつと出てまいりますけれども。

なぜこのような病を初めからもらって生まれてきたのか、これは我々の側には何もわかりません。けれども、そこには深い深い神さまのお計らいがあるはずです。少なくとも、私たちはずうつと永い間、主を信じて歩んできて、その中で裕美が石田俊浩君と結婚し、そしてその二人の愛の結晶として生まれてきたのが翔であり、衡平であるんです。だから、そのような者たちに理由なく変なことが起こるはずがない。別な言葉で言いますと、

「あなた方だからこそ、これを担っていけるんだ」

という主の信任のもとに、主が信じていてくださっているからこそ、あの二人の両親にこういう子供を授けられたのだと思います。

そして私が見るところ、石田君はどんどん変わってきました。初め、箱根高原ホテルに行く時はいつも、それこそ「運び役はするけれども、そのあとは知らん」と。集会には出ないで、自分は外で蚊帳の外に居る。中に入るべき人間ではないという、何かそんな思いを私は感じた。ところが、最近は違ってます。もう皆さんと本当に溶け込んでいる。そして、あの8月14日の夜も必死になって神さまに叫んだ。

「生まれて初めて神さまに真剣に祈った」

と言っていました。

「助けてくださいー!」



と。その思いはずうつと変わらないようですね。ですから、口先では「クリスチャンだ」なんて言いませんけれども、私からみたらこんな素晴らしいやつはいないと、そういう在り方を貫いています。だから、

「主のなさることはすべて時にかなってうるわしい」

とありますけれども、見方によれば、翔はもう本当に自分のギリギリのところまで命を生き続けた。もうこれ以上この世に留めておくことは、翔にとっては耐え難い身心の負担だったのではないか。だから、一番いい時にお召しくださったのだらうと、一方では思います。しかし、私は他方では、

「山口から帰ってきたらまたいろんな話をしようね」

と言ったのが断ち切られたでしょ。それがちよつと残念に思う。それから、そうやっていつもチャイムを押して私が会いに行ったら、

「おじいちゃんが会いにきたよ」

「おじいちゃんの顔を見てうれしいよ」

「会えてよかったよ」

なんていう、何でもない会話がもうできないという、これはとても——さつき喪失感ということを申しましたけれども——やはり私は人間ですもの。それはどこかに居てくれると思いますよ。向こうからこっちは見えているでしょうけれども、こっちは見えませんからね。そういうことからしますと、やはり人間としては、皆さまとうやって顔を合わせでお会いしお話もでき、握手もできるという関係はやはり欲しいですものね。

それが一方であります。と同時に、翔は自分のこの世での使命を立派に果して、そして主に迎えられるで、向こうで——それこそ名前のように、「羊の羽」ですね——従順な羊が羽をください、天翔^{あまか}けて行っているというふうにも思いたいわけです。いや、思っていると云ったほうがいいかもしれません。

翔がいなくなつて、天界においてもいないなんて、絶対ありえないことです。姿を変えて今いるだけのはなしで、地上の姿は確かに火葬に付せられまして、もう骨だけになりました。けれども、その肉体を脱ぎ捨てた翔が今度は本当の霊体を賜つて、キリストと一緒に働く。それが現在だと思えます。

だいいち、主イエス・キリストご自身を私たちは見ていない。

「見ていないけれども、その方を信じて、言い難い歓びにあふれている」

とペテロ書簡にありますように、これが私たちの現実なんです。主は我々に働いてくださる。しかも主のほうから我々の中に入ってきてくださるお方です。私たちがキリストをつかまえるなんて、とんでもない。主が我々を捕まえて、

「お前を愛しているよ。今まではお前は自分独りで歩んできた。けれども、それは実は違うんだ。私、キリストがあつてのお前だ。私はお前のことについて全責任



をもつ。お前を輝かすから、お前は私に従ってきなさい」

と。これが主と私の関係です。皆さんもそうです。どこまでもキリストが主で——キリストは神さまのことを「父」と呼ばれたけれども、神さまの「子」であって、愛で結ばれているように——「主」であって、我々は「僕」という姿です。どこまでもイエスさまご自身が主体であり、主役なんです。我々はそれを受けるだけ。

太陽が輝いている。太陽の光を我々は受ける。太陽の光を浴びる。そして生かされている。そういうことで、どこまでも主は見えないお方だけれども、霊界において太陽として輝いてくださっている。その熱と光と愛と生命を受けて、我々は「そのお方の御意は何か」ということを絶えず尋ねながら、御意に添った生き方をしていく。これが人間の一番、普通の素直な在り方なんです。

「信仰」なんて申しますと、何か難しい話のように思われます。

「聖書の解釈はどうする」

とか、そんなことは全然問題ではない。要するに、愛の主がいまして、我々をつかまえて生かしてください。それだけのこと。太いパイプで結ばれている。しかも、一人ひとりがみな違うんです。

冬に金沢へ行きますと、雪から樹木を守るために、上が絞られていて円錐状に縄が引いてあります。あの縄の一つ一つの端つこが我々なんです。キリストというお方が一人一人に自ら縄となって、綱となって捕まえて結んでくださる。だから、雪が降ろうが、風が吹こうがビクともしないという。それが自ずと輪をなして円をなしている。クリスマスの時にも同志社の大学はクリスチャンの学校ですから、クリスマスツリーもそういったイルミネーションで金沢の樹木のように輝くんですけれども、そういうふうな、どこまでも主が主体であって、我々一人ひとりが愛の綱で結ばれて、その愛の綱で生かされている。その愛の綱というのがまた道なんです、ね、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と。その道をずっと歩いていくと、主さまに到達する。そういう人生を我々は歩かされている。だから、

「たとえ死の陰の谷を歩むとも、^{わざわい}禍を恐れませんか。あなたが一緒にいてくださるからです」

という、あの詩篇の告白なんかも全くその通りです。だから、聖書にはウソはない。いろんな表現をしてありますけれども、また時代は違いますけれども、現代に全くそのままその本質は生きてくる。それを外側的なことに縛られて、躓いていたらつまらないですね。時代も違います、場所も違います。本来なら会いつこないものが、あんなに親しく迫ってくるというのも、そういった外側を超えた本質的なものが、我々をつかまえて離さないからなんです。そんなことを思います。



●一粒の麦

今日はヨハネ伝13章ですが、そこへ行きます前に、少しバックグラウンドを踏まえてお話してみたいと思います。8章には、前半に姦淫の女性を赦された場面がありますが、それは括弧で包まれています。そのあとです。8章12節から、

「¹²イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」¹³それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」¹⁴イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。」

これが13章にもまた出てくるものですから、今あらかじめ見ておきます。

しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。……²¹そこで、イエスはまた言われた。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない。」²²ユダヤ人たちが、『わたしの行く所に、あなたたちは来ることができない』と言っているが、自殺でもするつもりなのだろうか」と話していると、²³イエスは彼らに言われた。「あなたたちは下のもの(地のもの)に属しているが、わたしは上のもの(天界)に属している。あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。²⁴だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」と、わたしは言ったのである。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」(ヨハネ8・12-24)

「わたしはある」というのは——旧約聖書の出エジプト記の中でモーセが神さまに

「あなたのお名前は何ですか？」

と聞いた時、

「私は有りて在る者」

と仰った——「永遠の実在者」という表現です。それを「エゴ エイミ」という言葉で「わたしはある」とここで表わされている。要するに、神さまの本質をもった存在、永遠な存在ということなのです。

『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」

と。また問答が続いて、「いったいお前は誰だ？」なんていうことが続いていますが、そこは飛ばします。

それから、12章の所へいきますと、このあたりからもう最後のときが来ているわけです。「ナ



ルドの香油」のお話が出てきます。そして、そのあと20節から見ます。

「²⁰さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。²¹彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。²²フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。²³イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴はつきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。²⁶わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」(ヨハネ12・20-26)

ここを読みますと、さきほどの翔君と重なるんです。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」

「自分の命を愛する」というのは、「自分の命に執着する」という、自分の命をわがものとして執着するという姿が「自分の命を愛する」ということ。「ご自愛ください」というのは正しいんですよ。自分を大事にしなければいけません。神のくださった命を大事にしなければいけません。けれども、「執着する」ということは別です。ここで

「自分の命を愛する者」

というのは、

「自分の命に執着する者、固執する者」

御意に反してでも

「絶対にこれはこうでないといけません」

と駄々をこねる者、そういうふうに出てくたさい。そういう者は逆に失ってしまうところだ、「命を憎む人」というのは、

「執着しない人、自分の命に執着を持たない人」

これは

「それを保って永遠の命に至る」

という。一粒の麦となって地に落ちて死ぬ。そうすると、多くの実を結ぶ。

だから、私はさきほど、翔君の生涯というものの、そしてその死というものは、ちょうど「一粒の麦となって地に落ちた」、そういう死だ。その存在そのものを通して多くの実を結んでいくんだと、そういうふうな思いをいだいております。



「²⁶わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」

と。きつと今、大事にされていると思います。それから次。

²⁷「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、御名の栄光を現してください。すると、天から声が聞こえた。『わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。』²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。』³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

他の三つの福音書、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書は、「ゲッセマネの祈り」とか、そういうものが出てくる。ところが、ヨハネ伝ではゲッセマネの祈りの場面はない。ですから、今、読みあげましたものが実にゲッセマネです。

「父よ、できることなら、この杯を取り去ってください。しかし、私の意ではなく、あなたの御思いのままにしてください」

と言って、必死になって祈られた姿が出ていますね、マルコなんかでも。それに似合うような場所がここだと思う。

「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』というこの言葉の中に、他の福音書で「ゲッセマネの祈り」として表わされているところが込められているのだろうと私は思いました。

そして、その十字架を負いきられる。そのことによつて、この世の君が審かれる。

「³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。

というのは、霊の支配者です。サタンです。サタンが審かれる。そして、「地上から上げられるとき」というのはご復活(十字架・復活)です。

³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。³⁴すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によつて、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。』³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたが



たの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。³⁶光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」……

⁴⁴ イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。⁴⁵わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。⁴⁶わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に來た。⁴⁷わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために來たからである。⁴⁸わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。⁴⁹なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。⁵⁰父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」(ヨハネ12・20〜50)

ここまでは実は、イエスがこの世の人たちに対していろいろ語られている場面だと私は受けとっています。

●極みまで愛し給えり

そして次の13章から17章までは、最後の晩餐の場面です。いわばイエスの内部の者たちの中でイエスが滾々と語られた言葉がここから始まる。13章は有名な「弟子の足を洗われる」という場面です。それから14章では、別れの言葉が続きます。この14章からの所はいわばヨハネ伝のピークである、「ヨハネ伝の華である」と、案内の文章に書きました。それが12章から続きます。その14章の前にイエスが弟子たちに対して足を洗って、弟子としてのあべき姿をお示しになった。これが13章です。

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が來たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

ヨハネの福音書ではしばしば「時」というのが出てきます。「まだ時が来ていなかったのである」とかいいうのがずつとくる。ところが、ここにきまして、「その時がいよいよ來た」ということをイエスは自覚なさるわけです。しかも、それはどういう時かというのと、先ほども、「あなた方は自分自身がどこから來てどこへ行くか知らないだろう。でも、私はどこから來てどこへ行くかちゃんと分かっている。父のもとからやって來て、そして使命を果して、また父のもとへ歸っていく。そのことを私はよく分かっている。」



ただその時はまだ来ていない」

と、そのように自覚しておられた。ところが、「いよいよその時が来た」ということはつきり自覚された。その前にもう既に12章のところで、

「父よ、時がきました。どうぞ、あなたのご栄光を顕してください」

と祈っておられる。その時が来た。そこで

「……イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」

これは他の翻訳を見ますと、カトリック系のフランシスコ会という翻訳によりますと、

「イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たのを悟り、この世にいる弟子たちを愛して、終わりまで愛し抜かれた。」

とある。文語訳によりますと、

「超越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給えり。」

私はこの文語訳が好きなんです。「極まで愛し給えり」という。

さあ皆さんどうですか? もう自分はあと余命いくばくもない。世を去る時がきた。その時に、極みまでこの上もなく世にある者たちを愛する、愛しぬく。そんなことができませんか。癌の宣告を受けた。もういよいよもうあと余命一年くらいまでとしたら、

「二年間、何をしようか。せいぜい好き勝手なことをしてやろう」

というふうに思うか。それとも、

「いや、今までやり残したことを精一杯やろう」

と言うか。とにかく、みな自分なんです。はつきり言つて、自分を充実させる。自分として悔いのない生き方をする。自分を活かす。これも立派だと思う。せつかく賜った命ですから、それを完全燃焼させる。それはそれで尊い素晴らしいことだと思います。

「もう神も仏もあるものか」

と、そこでポシャッてしまうよりは、最後の火花を散らして燃えて輝く明かりとなって、世を終わるというのは、立派なことです。

ところが、イエスはそのまま上を行つておられる。ご自分のことは何も考えてない。

「世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給えり」

と。今までも愛して来られた。それを更に何倍も何倍もという深さをもって極みまで己れの弟子たちを愛し抜かれた。これはやはり、我々も死に際にそうありたい。それができるのは、我々の側から言いますと、我々は往くべき所がはつきりしていると、

「さあ今生の別れだ。とことん、残りの者たちを愛して愛しぬきなさい。そして私の所へいらつしやい」

と。そういう向こうの世界とこの現世というものが直結していなかったら、こんなことが



我々人間どもには言えない。でも、本当に直結していれば、この姿になれると思う。

旧約聖書を見ますと、みんなこの世を去る時に子供たちを呼んでいる。アブラハムにしてもヤコブにしても、全部、子供たちを呼んで、一人ひとりに手をあてて、「お前はこうだった」「お前はこうだった」「お前はこうなんだよ」とか、なかには叱られている子供もいたりなんかしまして(笑)、そういうふうにやってますね。ああいう、やはり自分がこの世を去る時という時には、示されるんでしょうか。

ドラマの場面でも、武将たちが死ぬ時でも部下を集めて、いろいろ言い残して、それで言い終わったら向こうの世界へ逝きますね。何か自分が世を去る時というのは自分で自覚するんでしょうか。武将でなくても、お母さんとかお父さんが本当に愛する者たちとの別れの場面で、しっかりと手を握って、いろんなことを語りかけて、全部言い終わったら、すつと息を引き取られるという場面がありますね。非常にやはりこの世を去るというのは厳粛な場面だと思います。残念ながら病院での死というのは、あまりそういうところに家族を居合わせてくれないのが多い。だから、本当に自宅でそういう形で息を引き取れるというのは、ものすごく幸せなんです。

ところが今は――僕はびっくりしたんですよ――翔がそうやって救急車で運ばれて、京大病院に入って手当てを受けて、二時間後に息を引き取りました。そうすると、警察が来るんです。へたすると、司法解剖なのか行政解剖なのか知りませんが、要するに虐待死ではないだろうかという――病院だったらそんなことはないけれども――自宅で死んだら必ず警察が来て、それを調べるそうですね。何と悲しい世の中なんだろうと思う。みんな死ぬ人は、病院なんかで死ぬのではなくて、家族に囲まれてみんなで見守られて死にたいと思うでしょ。ところが、老人がそういう形で死にますと、虐待死ではなからうかと。身体障害の者が亡くなりますと、虐待死ではなからうかという目で見て、解剖までする。それに対して、京大病院のお医者さんは常々診てくださっている方だから、「これは決してそんなのではない」と、はつきりと今までの病状から全部説明された。それで、警察のほうは納得したという。それは伝聞ですから、私は居合わせませんから、それ以上のことは言えません。間違っていたら許していただきたいんですけれども。

人間の死という厳粛な、厳かなものに対して、また最後の別れの儀式とでもいいましょうか、そういうものに対して、そんな目でしか見られない世の中というのは――現実に虐待が多いからなんでしょうね、老人に対する虐待とか、身体の不自由な者に対する虐待とか、そういうようなことが多いから、そんなことになってしまいうんだろうと思いますけれども――非常に私は残念で、ある意味でショックを受けましたね、その話を聞いて。よく京大病院の先生は頑張ってくれたなと。「お引き取りください」と言って、それで警察は納得して、引き下がってくれたというわけなんです。変な話になりましたけれども。



●十字架の愛

ヨハネ伝13章に戻ります。

「1 過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れる^{きた}を知り、世に在る己の者を愛して、極^{きわみ}まで之を愛し給えり。…… 3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、⁴夕餐^{ゆうげ}より起^たちて上衣^{うわぎ}をぬぎ、手巾^{てぬぐい}をとりて腰にまとい、

フランシスコ会訳では、

「3 イエズスは、父がすべてを^ご自分の手にお与えになったこと、また、ご自分が神から出て来た者であり、神のもとに帰ろうとして知っていることを知っておられた。」

新共同訳では、

「3 イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとして悟り、⁴食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」

とある。イエスという方は自分がどこから来て、どこへ帰っていくのか。それがいつそういうことになるのか。全部きちんと把握しておられた。皆さんはいかがですか。

「私は父のもとからやって来た。だから、今や父のもとへ帰っていく」

「私は主のもとから来た。だから、主のもとへ帰っていく。あばよ」

という別れ方ができるでしょうか。我々は、キリストと同じ意味で、「父から出てきた」とは言えませんが、土から出た我々でありながら、しかし、永遠の生命を頂いているということとは、もはやこの地に属さない。上に引き上げられていく。キリストの牽引^{けんいん}力によつて引き上げられていく。

「すべての人を私のもとへ引き寄せる」

と言われました。そういう主の吸引力、牽引力が私たちを、この世を去る瞬間に引き上げてくださる。だから、あとは亡骸^{なきがら}です。亡骸は土に属するものとして土に葬られる他はないわけですが、我々の本体、本質は永遠の生命を頂いていますから、これはもう必ず向こうに引き上げられていく。引き上げられざるを得ないということです。

だから、イエスという方は本当に素晴らしい。しかも、ご自分は神から出てこの世に來られた。そして、御業をあれだけなさった。言葉^{ことば}といい、業^{わざ}といい、ああいう言葉において、業において実際、愛を示された。そして、人間としての最高の生き方は神の御意に従って生きること。神の御意に従って歩む者にいつも神さまが一緒にいてくださる。

「私は常に御意を行っているから、決して父は私から離れられない。私を見捨てて独りぼっちになさらない。いつも御意を行っているから、神さまは一緒に居てくださる。そして、時がきたら引き上げてくださる」



と、はつきり言っておられる。ところが、イエスの場合は、引き上げられる前に大変な仕事が続いていました。「十字架にかかる」という、これはイエスお一人しか担いきれない重い十字架です。我々は簡単に、

「あの人は十字架を負っている、あの人はひどい十字架を負わされている」

とか申しますよ、比喩的に。けれども、そんなものと、イエスが負われた十字架というものとは全然、質が違います。またそれを負いきつてくださったからこそ、我々は死という冷酷な事態に対してもなお微笑んでいることができる。

さつき申しましたように喪失感があります。喪失感はあるけれども、それを乗り越えてなお輝く世界があつて、そこから我々はみんな引き上げられていく。やがて、私だって向こうへ往きますから、翔君と会うことができます。素晴らしい輝いた姿できつと彼は「おじいちゃん」と言ってくれるかもしれません。そういうものを保証してくださっている。命を懸けて保証してくださっている。これが十字架の愛、イエスの死ということなのです。

「私は命懸けでやります」

と人は簡単に言います。命を懸けるんですよ。キリストはそれを実際やってくださった。しかも、ご自分のせいではない。ご自分はそのまま光輝いて天へ昇っていくのが相応しいお方です。山の麓で祈っておられた時に眩い姿に変わられて、モーセとエリヤが降りてきたという。どういう出現世をするか、この世を脱出する方法について語り合っていた。ペテロとヨハネは気が遠くなるような話が出てきます。ああいう姿のイエスがなぜ十字架であんなに苦しまなければならなかったか。しかも、十字架の前にゲッセマネであんなに苦しまなければならなかったか。ということは、全部それはご自分のせいではない。人々の背きという罪ですよ、神さまに対する。過去・現在・未来、人間というのはいつまでたつても己れを主張する肉の姿で生まれてきてしまうんですから。それを全部、自分が引き受けていく。これは想像はできないですね、十字架というものは。

それをキリストは負いぬかれた。キリストは十字架の上で決して、もう苦しんでおられなかったと私は思う。ゲッセマネの祈りの時に一番苦しまれた。

「本当のそれが御意なんですか。本当の御意ならば、それに従います」

と。しかしながら、もしもそれが何かの思い違いだったりしたら、これは大変ですよ。それで、あんなに必死になつて祈られたのだと思います、ゲッセマネで。天使が来て助けた。額から落ちる汗は血の滴しずくのようだったと。それを突破された。はつきりとこれは御意だということを実感されてからはもう微動だになさらない。ピラトの前に出ようが、どんな酷い目に合おうが、全然何とも思っておられない。そして、十字架の上で、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のやっている事が分からないからです」

と。今日のところは、弟子たちを極みまで愛された場面ですけど、十字架の上では、この自分たちをこのような目にあわせるやつらに対して、



「彼らを赦してやってください」

と祈れる愛、そんなものは我々の中から出てきません。そういうことを思うんです。……

● 祈り

一言、お祈りいたしたいと思います。

主イエス・キリストさま、今日はこのように大勢の方々をこの場に引き寄せてくださいました。翔のことを愛してくださったお一人お一人が、今日の翔の召天記念会に馳せ参じてくださいます、本当にありがとうございます。翔は、こんなにも多くの人々から愛され大切にされて、そして、22年6か月余りのこの世の生涯を生き抜きました。本当に彼が世を去った時、「まことに彼は義人であつた」という思いをいただきました。ちょうど、イエスの十字架を目の前にしたローマの百卒長が、

「真にこの人は義人であつた」

と思わず叫んだように、私は、翔は立派であつたと思っています。しかしながら、また、翔がいないという寂しさも事実でございます。そうした人の世にあつて、あなたは限りない愛と慰めをもつて残れる者を労つてくださると共に、大希望をまた与えてくださっております。翔は変な所へ往つたのではありません。あなたの御許に参りました。そして今、あなたの御許で輝いて生きていることを私たちは信じております。また、ある時にはきつと姿を顕してくれるでしょう。そのようにして、

「天地一如となつていよいよ主の道を歩め」

と、そのように励ましをいただいているような思いがいたします。

どうぞ、ここにお集まりになつたお一人お一人が、本当に神さまの世界、キリストの世界はリアリティであり、実在界であり、本当にそこにこそ本ものがある。この地上はその影にすぎないと。しかし、その地上でこそ本当に生き抜いた者だけが、御国にふさわしい存在として、あなたに受け入れられ、喜ばれるということもまた、しっかりと受けとりたと思います。

主イエス・キリストさま、今日はまたヨハネ伝の13章を通して、あなたが私たちにお示しくくださったことを、皆さんとご一緒に味わうことができました。どうぞ、国籍だとか、民族の違いだとか、様々なイデオロギーの違いを乗り越えて、本当にあなたご自身が大事にされたことを大事にする、そういう愛の輪が広がっていきますように。我々一人一人をお導きくださるように希いたてまつります。主イエス・キリストの尊い御名によって、この祈りを御前にお献げいたします。アーメン。

